

■ PCN だより**PCN Volume 62, Number 6 の紹介 (その 2)**

先月号では、2008 年 12 月発行の PCN Vol. 62, No. 6 に掲載されている海外からの論文について内容を紹介した。今回は、日本国内からの論文について、著者をお願いして日本語抄録をいただき紹介する。

Regular Article

1. Clinical evaluation of BRL29060A (paroxetine hydrochloride hydrate) in post-traumatic stress disorder: 52-week, non-comparative open-label study for clinical use experience
Y. Kim, N. Asukai, T. Konishi, H. Kato, H. Hirotsune, M. Maeda, H. Inoue, H. Narita and M. Iwasaki

パロキセチン塩酸塩水和物の外傷後ストレス障害 (PTSD) に対する臨床評価——52 週間長期投与における臨床使用経験 (非対照・非盲検)——

【目的】本試験は本邦の外傷後ストレス障害 (PTSD) 患者を対象として、パロキセチン (20~40 mg) の有効性および安全性に関する臨床使用経験を、52 週間、非盲検・非対照の任意漸増法による長期試験として実施した。【方法】有効性評価には、Clinician-Administered PTSD Scale One Week Symptom Status Version (CAPS-SX) を用いた。【結果】CAPS-SX 合計点のベースラインからの変化量は、4 週、12 週および 52 週においてそれぞれ -19.1, -22.8 および -32.3 であった。また、Clinical Global Impression (CGI) Severity of Illness の変化量は、12 週および 52 週においてそれぞれ -1.1, -1.7 であった。12 週における CGI レスポンダー率は

46.9% であったが、52 週では 67.3% に増加した。治療期に移行した 52 症例のうち、25 症例が完了例であった。効果不十分による中止は 1 例であった。観察期開始時に中等症以下であった被験者の CGI-GI レスポンダー率は 20 mg/日投与においてより高用量の被験者に比べて高かった。一方、重症以上の被験者における CGI-GI レスポンダー率は 30 および 40 mg/日投与において高いことから、重症患者においてはより高用量の投与が有効であることが示唆された。【結論】パロキセチンの忍容性は、短期および長期投与ともに総じて良好であり、本試験における安全性プロファイルは海外試験および日本人を対象とした他の試験 (大うつ病性障害、パニック障害あるいは強迫性障害) と一致していた。本試験は二重盲検試験デザインではないものの、パロキセチンの長期使用における臨床的有効性の維持に寄与するとともに、良好な忍容性を示唆するものであると考えられる。

2. Insight in social behavioral dysfunction in schizophrenia: Preliminary study

M. Yoshizumi, K. Hirao, K. Ueda and T. Murai

統合失調症における社会行動障害に関する病識：予備的研究

【目的】統合失調症患者では、精神疾患に罹患していることについての病識が欠如していたり、或いは自身の精神病理についての気づきが欠如していることがこれまで報告されてきた。しかしながら、統合失調症患者が自身の社会行動障害について無関心であることについて、詳細に調査した研究はこれまでほとんどない。【方法】本研究で

は、FrSBeの自己評価版と観察者評価版を比較することによって、慢性期の統合失調症患者における社会行動障害に関する気づきの本質を調査した。【結果】第一に、統合失調症患者では、社会行動に関連する主要な3領域（アパシー・脱抑制・遂行機能障害）において問題が認められた。第二に、自己評価と観察者評価の差によって測定する気づきは、統合失調症患者では一様に障害されているのではなく、対象の推定IQと交互作用がみられた。つまり、統合失調症患者を推定IQによって2群に分けた際、高IQ群では自己の病態を実際よりも重く見積もる傾向があるのに対して、低IQ群では自己の病態を実際よりも軽く見積もる傾向がみられた。第三に、発症前の行動障害について現時点で回顧的に評価した場合においても、同じような病識のパターンがみられた。

【結論】結論として、今回の予備的な研究により、統合失調症患者の社会行動障害に関する気づきは認知機能に影響されることがわかった。さらにこの病識の評価方法は、現在の社会行動障害についての気づきのみならず、発症前の社会行動障害についての気づきを現時点で回顧的に推定する際においても適応し得ることが示された。

3. Cognitive profile difference between normally intelligent children with Asperger's disorder and those with pervasive developmental disorder not otherwise specified

T. Koyama and H. Kurita

正常知能を有するアスペルガー障害と特定不能の広汎性発達障害の認知プロフィールの差異

【目的】アスペルガー障害(AS)と特定不能の広汎性発達障害(PDD-NOS)は、ともに軽いPDDの一型である。【方法】Wechsler式児童用知能検査第3版(WISC-III)を用いて、正常知能(IQが85以上)を有するAS児28人(平均9.3歳,男24人)とPDD-NOS児78人(平均7.6歳,男64人)を、子どもの暦年齢を共変量にした共分散分析により比較した。【結果】全検

査IQと動作性IQに有意差はなかったが、ASは言語性IQ(103.9 vs 99.6)が高い傾向($P < 0.10$)があった。ASは算数(11.0 vs 9.9)と数唱(12.4 vs 11.6)からなる群指数の注意記憶(110.1 vs 104.5)が有意に($P < 0.05$)高く、符号(8.5 vs 9.8)が低い傾向があった。【結論】PDD特有の認知プロフィール(理解の低さ、積木模様の高さ)は両群でみられ、これは現行の診断基準の妥当性を支持するかもしれない。AS児の相対的に優れた言語能力は、彼らの幼児期の正常な言語獲得を反映していそうであり、また、強い数字への関心が、数学的な好成绩につながったのかもしれない。AS児の符号の低さは、彼らの極端な遅さ、迂遠さ、完璧主義などを反映したもののかもしれない。

4. Relationship between post-traumatic stress disorder-like behavior and reduction of hippocampal 5-bromo-2'-deoxyuridine-positive cells after inescapable shock in rats

A. Kikuchi, K. Shimizu, M. Nibuya, T. Hiramoto, Y. Kanda, T. Tanaka, Y. Watanabe, Y. Takahashi and S. Nomura

不可避刺激によるストレス負荷後のラットにおけるPTSD類似行動と海馬5-bromo-2'-dexyuridine陽性細胞数の減少との関係について

不可避刺激(inescapable shocks; IS)によるストレスで海馬の5-bromo-2'-deoxyuridine(BrdU)陽性細胞数が減少し、抗うつ薬がISによるBrdU陽性細胞数の減少を抑制することから、うつ病と神経新生の関連が指摘されている。しかし、ISを負荷されたラットでは、学習性無力になる、ならないに関わらず、BrdU陽性細胞数が減少することも示されており、この結果はストレスによる神経新生がうつ病とは関連がないことを示している。ストレスによって起きる疾患はうつ病だけではない。ラットではISがPTSD様行動も惹起することから、本研究では、ISに伴う海馬神経新生の減少がPTSD様行動と関連す

るかどうかを検討した。

ラットに IS 後 BrdU を腹腔内投与し、IS の 14 日後に能動的回避行動を改変した回避逃避課題を行った。PTSD 様行動を観察後、脳を摘出し、背側海馬を含む切片を免疫組織化学的に染色し、BrdU 陽性細胞数を測定した。

IS に伴い海馬歯状回顆粒下層の BrdU 陽性細胞数は減少し、BrdU 陽性細胞数は PTSD 様行動のうちの過活動性の行動との間に有意な相関を示したが、低活動性の行動との間には関連は認められなかった。

SSRI が海馬の神経新生を増強し、長期投与によって過活動性の PTSD 様行動を抑制することから、IS に伴う海馬神経細胞の分化や生存細胞数の減少に係る制御機構は過活動性の PTSD 様行動の発現過程と関連する可能性が考えられた。

5. Reduced frontopolar activation during verbal fluency task associated with poor social functioning in late-onset major depression: Multi-channel near-infrared spectroscopy study
S. Pu, H. Matsumura, T. Yamada, S. Ikezawa, H. Mitani, A. Adachi and K. Nakagome

高齢発症のうつ病における語流暢課題遂行中の前頭極部賦活と社会機能との関連について——多チャンネル近赤外線分光ロスコピーによる検討——

近年、脳機能画像研究から、高齢発症のうつ病 (LOD) における前頭前皮質の機能異常が明らかにされてきた。しかし、前頭前皮質機能異常と社会機能を含む臨床特徴との関連は明らかにされていない。我々は未治療の LOD 患者 24 人と年齢・性別を一致させた健常者 30 人を対象に 52 チャンネル近赤外線分光ロスコピー (NIRS; near-infrared spectroscopy) を用いて語流暢課題遂行中の前頭・側頭部の脳血液量変化、及びその変化と臨床症状や社会機能の重症度との関連を検討した。その結果、健常対照群に比して LOD 患者群で、前頭前皮質、上側頭皮質を含む広範な

領域にわたって oxy-Hb 値増大の低下が認められた。また、LOD 患者群の前頭極部における oxy-Hb 値増大は、社会機能に関する自己評価尺度 SASS 得点と有意な正の相関を示した。以上の結果より、前頭極部皮質の機能低下は LOD 患者における社会機能の障害と関連している可能性が示唆された。また、語流暢課題遂行中の NIRS は、うつ病患者の社会機能を評価する上で有用な臨床検査である可能性が示唆された。

Short Communication

1. Severity of depressive symptoms as predictor of impairment of quality of life in chronic migraine: Comparison with episodic migraine
L. Canuet, R. Ishii, O. Fernandez-Concepcion, M. Iwase and M. Takeda

慢性偏頭痛において抑うつ症状の重症度は QOL の障害の程度を予測する：挿間性偏頭痛との比較

挿間性偏頭痛および慢性偏頭痛におけるクオリティオブライフ (QOL) の予測因子を同定するため、計 116 名の患者に対し、HANA (Headache Needs Assessment) を用いて QOL を評価し、あわせて頭痛症状による障害度と抑うつ症状を評価した。その結果、QOL は挿間性偏頭痛と比べ慢性偏頭痛において有意に障害されていた。また両群において頭痛症状による障害度が QOL の予測因子となり、慢性頭痛において抑うつ症状が QOL の予測因子となっていた。さらに QOL は、性別 (女性)、頭痛の強さ、頭痛に関連した嘔気とも関連していた。今回の結果より、慢性頭痛患者の QOL の障害において、抑うつ症状が重要な役割を果たしていることが示された。

2. Schizo-nomenclature: A new condition?
T. Maruta and M. Iimori

“Schizo” 名称：新しい状態?

精神医学用語には、スティグマが内在されているものが存在する。2002 年 8 月に日本精神神経

学会の学術総会で、学会として精神分裂病から統合失調症へと呼称変更されることが決定された。本研究は、世界精神医学会の「分類、診断評価法及び命名」部会のメンバーの80名を対象として、2006年に調査されたものである。うち、21名が回答し、9名(45%)が、“schizophrenia”はこの障害の呼称として適切ではないと回答し、また、回答者の半数が、“schizophrenia”という用語にはスティグマが内在されていると回答した。

3. Electronic media use and suicidal ideation in Japanese adolescents

Y. Katsumata, T. Matsumoto, M. Kitani and T. Takeshima

日本における青少年の電子メディア利用と自殺念慮との関連性

本研究では、青少年の電子メディア利用と自殺念慮との関連性を明らかにすることを目的として、中学生を対象とした自記式質問紙による調査を実施した。本研究の結果、自殺・自傷に関する情報をインターネットで調べた経験、電子メディア利用に関連した不安や傷つき体験、周囲の友達や親への不信感といった変数が、自殺念慮経験と有意に関連していた。これらの結果をもとに、電子メディア利用が日本の青少年の自殺念慮に与える影響について考察を行った。

(精神神経学雑誌編集委員会)